

カーサラゴード・カラダ語文字資料から
～ゴア八連～

gōvāṣṭaka: A Written Text in Kasaragod Karhadi

児玉望

Kodama Nozomi

§ 0. カーサラゴード・カラダ語

カーサラゴード・カラダ語は、インド南西部ケーララ州カーサラゴード県からカルナータカ州マンガロール県（旧ダクシナカンナダ県南部）にかけての地域に分布する、インド・アーリヤ系少数言語である。多く見積もっても2万人未満の話し手は、ほぼ全員がドラヴィダ系のカンナダ語およびトゥル語との多言語併用者であり、カーサラゴード・カラダ語は、この地域のカラダ・バラモンが母語として習得し、もっぱらコミュニティーの成員の間でのみ使用される、コミュニティー言語である。このコミュニティーは、マラータ・バラモンの1セクトであるマハーラーシュトラ州のカラダ・バラモンの出自を伝承しており、移民としてこの言語を継承してきたと考えられるが、現在この言語では他の地域のカラダ・バラモンとは意思の疎通ができない。言語的には、マラーティー語よりはむしろ西海岸のコンカニ語との共通点が目立ち、全体的に中期インド・アーリヤ語の特徴を残す保守的な面と、継続したドラヴィダ系言語との併用に起因すると見られるかなりラジカルな言語革新との両面で特徴付けられる。Ghatage (1968), Rajathi (1976), Kodama (1991, 1995, 2001) といった断片的な記述のほかは、まとまった言語学的な記述はない。Bejjūr (2001) は、この言語の話者による最初の文法書である（カンナダ語 全64ページ）。

このコミュニティーは、この地域の他の上位カーストのヒンドゥー・コミュニティーと同様、文字言語としてはカンナダ語を用いており、カーサラゴード・カラダ語は、本来は無文字言語である。しかし、1970年代にはいり、コミュニティー団体が結成されたのを契機として、言語文化を含むコミュニティー文化を自覚し育成しようという機運が高まり、いくつかの文芸作品が生み出され、カンナダ文字で記録されて出版されることになった。小論で取り上げる「ゴア八連」(Padre 在住 śiva を名乗る匿名作者作品) もそのひとつである。8連の4行詩から成る160語あまりの小品であるが、カーサラゴード・カラダ語の

特徴を簡単に紹介するための素材としては恰好の分量でもあり、筆者は、1996年の第41回国際東方学会議、九州大学言語学懇話会をはじめ、この作品を口頭発表で引用したことがある。また、熊本大学文学部の2003年度後期言語分析演習でも資料として取り上げた。小論では、口頭発表では不十分であった点を補い、特に語彙に関するより詳細な情報と、表記に関する考察を追加して、この作品の言語的特徴をまとめる。

§ 1. 資料

1986年、カーサラゴード県のアガルッパデー (agalpāḍi) 寺院に本拠をおくカラダ・バラモン互助会 (karhāḍa brāhmaṇa abhyudaya saṃgha) が結成10周年記念祭を挙行し、その記念誌としてカンナダ語の『カラダ (karhāḍa)』が刊行された。コミュニティの歴史、アガルッパデー寺院をはじめとする主要な宗教施設の縁起、ゴートラ (外婚集団としての氏族) とそれに応じた家族の分類、コミュニティ出身の著名なバラモンの事跡文化的業績といった、現代インドのコミュニティ団体の刊行物にしばしばみられる内容のこの記念誌の後半が、寄稿作品集である。寄稿者の多くはコミュニティ出身者であるが、チトパーオン・バラモンという別の移民コミュニティに属するプラバーカル・ジョーシ (M. Prabhākara Jōśi) 氏の「ダクシナカンナダのゴア出自の諸コミュニティ (dakṣiṇa kannāḍadalli gōvāḍimḍa baṃḍa janavargagaḷu)」のような興味深い寄稿もある。これらカンナダ語の詩作やエッセイに続く後半部がカラダ語による作品の寄稿で、以下のように大別される。

(1) ヤクシャガーナ劇「プラフラーダ伝 prahlāḍa caritra」

ヤクシャガーナは、ダクシナカンナダ県一帯でコミュニティを超えて愛好される舞踊劇である。伝統的にはカンナダ語で演じられる古典劇であるが、現代ではトゥル語やコンカニ語といったコミュニティ言語の作品も多く創作され、テーマも歴史劇や風刺劇など多様化しており、このカーサラゴード・カラダ語翻案もそのような流れの中にある。自身もヤクシャガーナ劇の高名な演者であった故シュリーパティ・シャーストリ師 (guru śrīpati śāstri) の未完の遺作を、ボランジャドカ・ガナパティ・バット (bolimjāḍka gaṇapati bhāt) 氏が補作した作品。テーマはクリシュナ信仰説話のひとつである。

(2) ガーンドラ gāṃḍra

ガーンドラは、結婚に関連するさまざまな儀礼において、主として女性達によって歌われたクリシュナ信仰説話を下敷きにした祝い歌である。カンナダ語で歌われるショーバネ

sobhāne hāḍu (「祝い歌」) をカーサラゴード・カラダ語に翻案したものと見られ、シュリーパティ・シャーストリ師の作品3作とその子息のクリシュナ・バット (kṛṣṇa bhat) 氏の作品1作が収録されている。ガンドラという語自体は借用語ではなく明らかにインド・アーリア語起源の語であるが、paḍya 「歌」とは異なりもっぱらこの祝い歌のみを指す。コミュニティの複数の人々から、カーサラゴード・カラダ語のガンドラを記憶している女性がいるという話を聞いたが、実際に会うことはできなかった。クリシュナ・バット氏には直接会って話を聞いたが、本人の作品は創作であるとの証言を得た。

(3) 創作詩と頌歌

「ゴア八連」のほか、創作詩一編と宗教的な内容の頌歌が収録されている。詩作は、いずれも4行1連の構成である。

これらを収録する『カラダ』が出版されたあと、カーサラゴード・カラダ語によるヤクシャガーナ劇の翻案や詩集が出版され、また、ヤクシャガーナ劇や頌歌がカセットテープで流通するようになった。2001年にはカラダ・バラモン互助会が25周年を迎え、コミュニティの文化活動は一気に活性化している。同じく記念誌として刊行された『カラダ・ラジャタ karāḍa rajata』には、カーサラゴード・カラダ語の語彙集のほか、創作詩や子守唄などのカーサラゴード・カラダ語作品がカンナダ語作品と区別なく収録されている。農村電話が急速に普及したことを受け、コミュニティ電話帳が刊行され、月刊誌も発行されてカーサラゴード・カラダ語の文芸作品の発表の場ともなっている。

このように、カーサラゴード・カラダ語がさまざまな人々に書かれるようになった結果、それらの作品の間の言語的な違いが目に触れることになった。その多くは、正書法が確立しておらず、カンナダ文字を用いてカーサラゴード・カラダ語の音韻をそれぞれが臨時に表記していることによる表記の揺れに根ざすものである。しかし、これらの表記の揺れの中には、何らかの言語的変異の存在を示唆するものもある。たとえば、コミュニティの名称自体も、1986年の段階では、古マラーティー語にも用例の見える karhāḍa の綴りが用いられていたのに対し、2001年には h のない karāḍa が採られている。一般的に、子音の有気・無気の対立は、語彙によっては話者ごとにかなりの揺れが観察されるが、コミュニティ名称はその一例である。これらの変異の性質は、今の段階では明らかにできないが、まず、同じ話者の作品の中にどの程度の揺れが見られ、どの程度の一貫性があるかを記録しておくことは、意味があると思われる。「ゴア八連」は、『カラダ』所収の他の

作品と同様、カンナダ文字の長母音表記を母音の音量ではなく音質の違いに充てる、この地域のコンカニ語とも似た表記慣行を採用しているが、この表記がどの程度揺れておりどの程度に音韻的に有意味であるかについても、後に詳しく論ずる。

§ 2. 本文と解説

§ 2-0. 転写法

原表記のカンナダ文字の二重母音字を除く母音字・母音記号を1文字のローマ字、子音字・子音記号は、有気音字については対応する無気子音ローマ字とシングルクォーターションの組み合わせ、それ以外を1文字のローマ字で転写する。たとえば、mh は、子音字 m と子音記号 h の結合子音字を転記し、b' は、一字の有気子音字 bh に対応する。ṃ はアヌスワラ記号である。二重母音字については、ai と au で転写する。

原表記では一語として表記されている単位をさらに分析して、ハイフンと等号を区切り記号として導入した。ハイフンは活用語の接辞の区切り、等号は、小辞付加など音韻的独立性を失った語の結合を表示する。見出しで使用したハイフンは、記述部分の区切りに対応する。

§ 2-1. 構成と凡例

まず、4行の一連ごとに日本語への逐語訳、さらに、語源情報を含む語彙リストを提示する。表記と音韻・文法・語彙に関する特徴は、次章以下で一括して論ずる。

語彙リストでは、以下の略号を用いる。

1/2/3	人称
m./f./n.	男性/女性/中性
sg./pl.	単数/複数
nom./erg./obl.	直格/能格/斜格 (nom. はしばしば省略)
acc/dat	与対格
v.	動詞
v(i)/v(a)/v(av)/v(V)	活用タイプ。語幹母音として i, a, avu/ayi, ゼロを取る。
adj.	形容詞
adv.	副詞

主としてそれぞれの語が固有語彙（インド・アーリヤ系語彙）であるか、ドラヴィダ系言語からの借用語彙であるか、あるいはサンスクリットからの借用語であるかを区別する

ために、語源情報を加えた。固有語かどうかの判定のために重視したのは、カーサラゴード・カラダ語の話し手の移住と同時代の近縁言語であると考えられる古マラーティー語と、同時代にマンガロール周辺地域に移住したと考えられるサウスカナラ・サーラスワットのコンカニ語方言である。これらの資料に記録された親縁語が見当たらない場合は、コンカニ語・マラーティー語の現代語辞書を参照した。

- Ka. カンナダ語
 Tu. トゥル語 (Tulu Lexicon) 動詞は語幹 (非過去/過去)
 OM. 古マラーティー語 (Tulpule & Feldhaus 2000) 動詞は不定法 (接辞-*ne*)
 SKKo. コンカニ語サウスカナラ・サーラスワット方言 (Ghatage 1963) 動詞は命令法 2sg.
 (接辞ゼロ) または不定法 (接辞-*čē*)
 Ko. 現代コンカニ語 (Maffei 1883, 1983, Borkar 1999, 2001) 動詞は動名詞 (接辞-*ap(a)*)
 Ma. 現代マラーティー語 (主として Molesworth 1873, 1985) 動詞は不定法 (接辞-*ne*)¹⁾
 Skt サンスクリット

§ 2 – 2 . *gōvāṣṭaka* (ゴア八連)

§ 2 – 2 – 1 .

amma majj=amma mēl-ḷaṃ kāgada tutt'-aṃ
kaśśaṃ=ṇu barōv-uṃ bōḍā-r-ḷaṃ barapa matt'-aṃ
hāṃga yā gōvē-nnu kas-aṃ vāṃts-uṃ hāvvaṃ
vāgg'ā-ca māḍi-nnu ghāl-li tummi=le mukka

おかあさん、私のおかあさん、着きました。手紙。あなたの。

何と、書けばよいでしょう。頭の上の、(ブラフマ神が記した) 書き込み、私の(運命)を。

ここ、この、ゴアで、どう、生き延びましょう、私。

虎の、棲家に、ほうりこんだのです。あなた方まで、私を。

- amma f.* 借用語「母」。固有語 *āvayi* は、*bāppayi* 「父」と同様、蔑称としてのみ用
 いられる。Ka. *amma* OM. *āyisā* SKKo. *a:vsu*
majj(i) amma (連声による母音脱落)
majj-i 1sg. 不可処分所有形容詞-f. sg.
mēl-ḷaṃ *mēḷapa v(a)* 「手に入る」過去分詞 n. sg. OM. *mēḷane* SKKo. *mēḷcē* "to find"

kāgad-a n.	「紙、手紙」 Ka. kāgada OM. kāgaḷa SKKo. ka:gəḍə "letter" ka:gəḍu "paper" Ko. kāgād n. "paper, letter, sheet, page"
tutt'-aṃ	2sg. 可処分所有形容詞-n. sg.
kaśśaṃ	「何」 OM. kāmhī SKKo. kəslē
ṇu	引用小辞「と」 < mhaṇ-ṇu 「言う」 絶対分詞
barōv-uṃ	baravupa v(av) 「書く」 命令法 1sg. OM. baravaṇe "to show off", SKKo. bə:rəyi "to write" Ko. barovap(a) "to write"
bōḍā-r-laṃ	bōḍa n. 「頭」 obl.-所格 "on" 形容詞-n. sg. OM. boḍika "with a shaven head" Ko. boḍ(a) "head, pate, brains"
barap-a n.	「書いたもの」 -n. sg. cf. baravupa v(av) 「書く」 Ka. barey- からの早期の借用か。 Ko. barap(a) "writing"
maṭṭ'-aṃ	1sg. 可処分所有形容詞-n. sg.
hāṃga adv.	「ここ」 OM. etha < atra SKKo haṅga Ko hāṃgā, hāṃgara
yā	(v)ō/yēm/yī 近称指示代名詞「これ・この」 m./n./f. sg. obl.
gōvē-nnu	gōve n. 「ゴア」 obl.-所格 "in" Ko. gomya(n) n.
kaśaṃ adv.	「どのように」 OM. kasā SKKo. kəṣi Ko. kaśeṃ
vāṃṣ-uṃ	vāṃcapa v(i) 「生き(のび)る」 命令法 1sg. OM. vāṃcaṇe SKKo. vā:ci "to survive" Ko. vāṃcap(a)
hāvaṃ	1sg. nom. OM. mī SKKo. ha:vō Ko. hāṃv(a)
vāgg'ā-ca	vāghu m. 「虎」 不可処分所有形容詞-f. sg. obl. OM. vāgha m. SKKo. va:gu
māḍi-nnu	māḍi f. 「棲家」 obl.-所格 "in" ?OM. māḍi "multistoreyed house" Ma. vāgh(a)bīl(a) "tiger's den" Ko. māḍ(a) f. "thigh" ?CDIAL 9852 mandira "house, palace"
g'āl-li	ghāllapa v(i) 「投げる、勢いよく置く」 過去分詞 f. sg. OM. ghālaṇe SKKo. gha:li "to put" Ko. ghālap(a) "put in, put on, insert, pour, spread etc."
tummi	2pl. nom. OM. tumhe SKKo. tummi Ko. tumī
le	小辞「も、さえも、全部」 Tu. la
mukka	1sg. acc/dat OM. mālā SKKo. makka Ko. mākā

§ 2 - 2 - 2 .

ayyō maṭṭ'-a-laṃ yēm g'ara, maṇṣy-a
g'ōra pāpa=cī kell-aṃ tākka yī śikṣ-a

rōgiṣṭ-u ō mām-u, hāttari khiṃts-allo

māy-i dā-lleri kaśśam b'ārī jhōr-u

ああ、私の、この、家、人々。

とんでもない、罪を、犯したのです。それに、この、罰が。

重病入です、この、舅、寝莫薩 (に)、貼りついています。

姑、といえば、何でしょう、すごい、気性です。

ayyō	間投詞 < Ka. ayyō 「おとうさん！」
matt'-a-lam	1 sg. 可処分所有形容詞-n. sg. -長形
yēṃ	近称指示代名詞「これ・この」 n. sg.
g'ar-a n.	「家」-n. sg. OM. ghara n. SKKo. ghə:rə "house" Ko. ghar(a)
manuṣy-a n.	「人」-n. sg. Skt manuṣya OM. manunya, mānusa Ko. manīs(a)
g'ōra adj.	「ひどい」 不変化形容詞 Skt ghora
pāp-a n.	「罪」-n. sg. Skt pāpa
cī	強調小辞 OM. ca, ci, cī SKKo. čī
kell-am	karapa v(i) 「する」 過去分詞-n. sg. OM. karaṇe SKKo. kə:ri
tākka	tēṃ/tō 遠称指示代名詞「それ・その」 m. /n. sg. acc/dat
yī	近称指示代名詞「これ・この」 f. sg.
śikṣ-a f.	「罰」-f. sg. Skt śikṣa
rōgiṣṭ-u m.	「重病人」 m. sg. Skt rogiṣṭa OM. rogiyā SKKo. ro:gi
ō	近称指示代名詞「これ・この」 m. sg.
mām-u m.	「母方のおじ、父方のおばの夫、義父」-m. sg. OM. māmā SKKo. māmu
hāttar-i f.	「寝莫薩」-f. sg. OM. āṃthurāṇa f. "bedding" Ma. āṃth(a)rī, hāṃt(a)rī SKKo. hantulṇə "bed" Ko. hāṃtar(a) f. "bamboo mat" hāṃt(u)rūṇ(a) f. "bedding"
khiṃts-allo	khiṃcava v(a) 「張り付く」 再帰過去分詞-m. sg. ?CDIAL 3881 khiñc- "to drag, to pull" Ko. khiṭap(a) "be fixed" hāṃt(u)rūṇāk(a) khiṭileṃ "bedridden"
māy-i f.	「父方のおば、母方のおじの妻、義母」-f. sg. SKKo. māyī "mother-in-law" māmi "maternal aunt's wife"
dā-lleri	dāvupa v(V) 「なる、そうである」-条件分詞 SKKo. ja "to become"
b'ārī adj.	「重たい、特別な(強調語)」不変化形容詞 OM. bhārī adj. "difficult" SKKo. bhari "very much" Ko. bhārī "heavy, too much, difficult"

jhōr-u m. 「怒りっぽさ」-m. sg. OM. jora m. "fever" SKKo. jo:r "force" Ko. jora m. "fever, force"

§ 2 - 2 - 3 .

ṭippū-cā kālā-tsō pōrn-ō kramu hāṅga

aṭ'rā hatyā-nnaṃ kācce kāppaḍa=ci

punhavē caṃdrā-tsō tīl-ō kāpalā-ri

śēṇa sārō-nnaṃ g'ara b'ari

ティプーの、時代の、古い、しきたりです。ここは。

18ハッティの（長すぎる）、カッチェ（に着る）、サリーです。

満月の、月の（ように大きい）、しるしを、額に。

牛糞を、塗らなければなりません、家、全体に

ṭippū-cā 「マイソール藩王ティプー・スルターン（1753-1799）」不可処分所有形容詞-n. sg. obl.

kālā-tsō kāla n. 「時」不可処分所有形容詞-m. sg. Skt kāla

pōrn-ō adj. 「古い」-m. sg. OM. purāṇa "ancient" SKKo. pōrn-e "old"

kram-u m. 「秩序、しきたり」-m. sg. Skt krama Ma. kram(a) m. "order, method, arrangement"

aṭ'rā 「18」 OM. aṭharā SKKo. aṭhra Ko. aṭh(a)rā

hatyā-nnaṃ hatti f. 「ハッティ(腕の長さ)」-pl. obl. -長形容詞-n. sg. OM. hāṭa "arm's length, measure of land"

kācce Ka. kacce 「サリーやドーティーの端を股を通してズボンのようにして着る着方。(現代南インドでは女性の kacce は労働着)」 Skt kaccha- OM. kāsavaṭā, kāsavaṭī, kāsavaḍā

kāppaḍ-a n. 「布、サリー」-n. sg. OM. kāpaḍa n. "a strip of cloth" Ko. kāpaḍ(a) "cloth, nine yard saree"

punhav-ē ?punhava f. 「満月の日」-obl. OM. punava, puniva f. "the full moon day" SKKo. punnəṃ "full moon day" Ko. punav(a)

caṃdrā-tsō caṃdru m. 「月」不可処分所有形容詞-m. sg. OM. cāṃda m. SKKo. čəndru

tīl-ō m. 「額のしるし」-m. sg. Skt tilaka OM. tīlā, tīlā m. "a mark on the forehead" Ko. tibo "tilak on the forehead"

kāpālā-ri	kāpala n. 「額」-所格"on" Skt kapāla OM. kapāḷa n. SKKo. kapa:lə Ko. kapal(a)
śēṇa n.	「牛糞、水牛糞。牛糞と灰を混ぜて水に溶かしたもの(床や地面の舗装材)」 Skt cāgaṇa OM. śeṇī f. "cowdung cake" Ma. Ko. śeṇ(a) n. "cowdung"
sārō-nnaṃ	sāravupa V(av) 「塗り広げる」 未完了分詞 n. sg. OM. sārāṇe "to smear, to rub, to draw out, to set aside etc." Ma. sārav(a)ṇe SKKo. sarəy "to besmear with cowdung" Ko. sār(a)vaṇ(a) "layer of cowdung or mud"
b'ari adv.	「いっぱい」 OM. bhari, bharīm <postposition> "throughout, fully" SKKo. bhə:ri "to fill" Ko. bhar(a) f. "filling"

§ 2 - 2 - 4 .

hām-tya p'uḷḷerpaṇā-ṃtu ceḍḍu-vom āṭ'a

haṭ'akar-uṃ tīm majj-o k'ā-ri b'ojj-ō

auṃt'-e-lē mhāṃtar-ē sakkaḷaṃ gell-eri uḍk-uṃ

rātt-i madrāttī-ka yaupa aparūpa

この人の、前の(結婚の)、子供たちが、8(人)

ダダをこね、彼らは、私のを、食べます、年忌のご馳走を。

うちの、年寄り(の旦那様)は、朝早く、出かけると、起き上がって

夜中、真夜中に、帰ります、不規則に

hām-tya	yē/yīm 近称指示代名詞 m. -f. /n. pl. -可処分所有形容詞-n. sg. obl.
p'uḷḷerpaṇ-āṃtu	「前の結婚(-paṇa は抽象名詞派生接辞)」 obl.-所格"in"形容詞(接辞脱落形) OM. puḍhāṃ "before, in advance" Ma. pratham(a)var(a) "first marriage" Ko. phuḍeṃ "before"
ceḍḍu-vom	ceḍḍuṃ n. 「子供」-pl. SKKo. čerdū Ko. ceḍūṃ "girl" ceḍo "boy"
āṭ'a	「8」 OM. āṭha SKKo. a:ṭə Ko. āṭh(a)
haṭ'akar-uṃ	haṭha karapa 「強情をはる」-絶対分詞 Skt haṭha OM. haṭa m. "obstinacy"
tīm	遠称指示代名詞「それら、彼ら」 n. pl.
majj-o	1sg. 不可処分所有形容詞-m. pl.
k'ā-ri	khāvupa v (V) 「食べる」-現在時制-2/3sg. Skt khād- OM. khāṇe SKKo. kha Ko. khāvap(a)
b'ojj-ō m.	「年忌に振舞われる食事」-m. sg. OM. bhoja n. "delight" bhojā m. "protégé"
auṃt'-e-lē	1pl. 可処分所有形容詞-m-f. pl. -長形 OM. āmīm SKKo. ammi/am-

- mhāmtār-ē adj. 「老いた」-m. pl. (尊称複数) OM. mhātārā m. SKKo. mhātar-ō Ko. mhātāro
 sakkaḷaṃ adv. 「早朝」 Skt satkāla OM. sakāḷa "early morning" SKKo. sākā:ḷi Ko. sakāḷ(a)
 gell-eri voccapa v(a) 「行く」条件分詞[命令法 2sg. vōca 現在時制語幹 vē-現在分
 詞語幹 vett-] OM. jāṇe "to go" SKKo. vā:cə "to go" Ko. vacap(a)
 uḍk-uṃ uḍkapa v(a) 「起きる」-絶対分詞. uḍkapa と同様に派生接辞-k を含む動
 詞として、bheḍkapa v(a) 「すわる」OM. uṭhaṇe "to appear, to be exhausted"
 Ma. uṭh(a)ṇe "to rise" SKKo. uṭṭa "to rise" Ko. uṭhap(a) "to wake up, to rise
 up"
 rātt-i rāti f. 「夜」-obl. OM. rāti, rātī f. "night" SKKo. rāti "night"
 madrāttī-ka madrāti f. 「真夜中」-acc/dat
 ya-upa v(V) 「来る」-動名詞 sg. [命令法 2sg. yō 過去分詞 āyil-] OM. yeṇe "to come"
 SKKo. yo "to come" Ko. yevap(a)

aparūpa adj. 「不規則、不定」(不変化形容詞?) Skt aparūpa

§ 2 - 2 - 5 .

ō jāg-o yī b'ās-a hāṃga-tsaṃ yēm jana

mukka paḷō-ṃcī-li dṛṣṭ-i vakra

pannarā dīsā-nnu mukka baḍipp-alaṃ gōve

kasam dīs-u nīk-item? tūṃ sāṃga mukka

この、土地、この、言葉、ここの、この、人々

私を、見る、視線は、意地悪です。

15 日で、私に、うんざりさせました、ゴアが

どうやって、日を、暮らしましょう?あなたが、教えてください、私に。

jāg-o m. 「場所」-m. sg. Ma. jāgā "place" Ko. jāgo "place"

b'ās-a f. 「ことば」-f. sg. OM. bhāsa f. "instructions, a way, a style, consent,
 a thought, an idea, a promise" Ko. bhās(a) f. "language, dialect"

hāṃga-tsaṃ hāṃga 「ここ」所格形容詞-n. sg.

jan-a n. 「ひとびと」-n. sg. OM. jana n. pl. Ko. jana m. pl.

paḷō-ṃcī-li paḷevupa v(V) 「見る」-未完了分詞-f. sg. -長形 [命令法 2sg. pa:ḷe] OM.
 pālāṇe, pālāṃṇe "to see, to watch, to look at" SKKo. pā:ḷe "to see" Ko.
 paḷovap(a)

dr̥ṣṭ-i f.	「視線」-f. sg. Skt dr̥ṣṭi OM. dr̥ṣṭī f. "vision, sight"
vakra adj.	「ゆがんだ、邪悪な」(不変化形容詞) Skt vakra
pannara	「15」 OM. panhara SKKo. pāndra Ko. paṃd(a)rā
dīsā-ṇnu	dīsu m. 「日」 pl. obl.-所格"in" OM. dīsa m. SKKo. di:su "day" Ko. dīs(a)
baḍippa-alam	baḍippapa v(a) 「(経験者と格) 飽きる」再帰過去分詞-n. sg. Tu. boḍi- "be tired, be exhausted, be done, be satiated, cloyed, surfeited"
nīk-item	nīkāpa v(i) 「押す」分詞派生未来時制-1f. sg. Tu. nīk-, nūk- "to push"
tūṃ	2sg. nom. OM. tuṃ, tūṃ SKKo. tū Ko. tūṃ
sāṃga	sāṃgapa v(a) 「話す、告げる」命令法 2sg. OM. sāṃghaṇe "to tell, to narrate" SKKo. sā:gə Ko. sāṃgap(a)

§ 2 - 2 - 6 .

t'aiṃ auṃ-t'yā g'arā-ṇi kar-ri oṭṭu kaśśaṃ?

mukka taṃts-om vuḍāsu khā-ṃtaṃ pī-ṃtaṃ

hāveṃ vay-illaṃ śēvaṃt-yā mūḷa kaṣaṃ atsa?

udo kōṇa rikkē-ra? p'ull-aṃ dā-ri=ki, attaṃ?

そちら、私たちの、家で、やっていますか、みんな、何を。

私に、そちらの人たちの、思い出が。食べるたび、飲むたび。

私が、植えた、菊の、株は、どんなですか？

水は、誰が、やっていますか？花は、咲きますか、もう？

t'aiṃ adv.	「そこで」 OM. tetha, tethala SKKo. thə:ī "there" Ko. thaṃy(a), tiṃgāṃ "there"
auṃ-t'yā	1pl. 可処分所有形容詞-n. obl.
g'arā-ṇi	「家」-所格 OM. ghara n.
kar-ri	karapa v(i) 「する」-現在時制-2/3pl.
oṭṭu	「みんな」 Tu. oṭṭu "total, whole"
taṃts-om	tē/tūṃ 遠称指示代名詞 pl. 不可処分所有形容詞-m. sg.
vuḍā-s u m.	「思い出」-m. sg. SKKo. uḍā:s kəri "to remember" Ko. ug(a)ḍās(a) m.
khā-ṃtaṃ	khāvupa v(V) 「食べる」-副詞的現在分詞
pī-ṃtaṃ	piyevupa v(V) 「飲む」-副詞的現在分詞 [命令法 2sg. pī] OM. piṇe SKKo. pi "to drink" Ko. piyevap(a), piyovap(a), pivap(a)

hāveṃ	1sg. erg.
vay-illam	vavupa v(i) 「植える」能動過去分詞-n. sg. [命令法 2sg. vāvīm] Skt vap-SKKo. və:yi "to sow" cf. OM. vāpa "scorched earth ready for sowing" Ma. vap(a)ṇe
śēvaṃt-yā	śēvaṃti f. 「インド菊 <i>Chrysanthemum indicum</i> , Linn.」 Tu. sēvaṃtīge, sēvaṃtīge
mūḷ-a n.	「根、株」 OM. mūḷa n. "the source of something, a root of a tree, a call, an invitation, a nail, the name of a constellation" SKKo. mu:ḷə "root"
atsa	āccapa v(a) 「ある、いる」現在時制-3sg. OM. āha, āhāti, asaṇe "to be, to exist" SKKo. a:ščē "to be" assə "is" Ko. āsap(a)
udo n.	「水」 (obl. udakā) SKKo. udda:kə "water" Ko. udaka n.
kōṇa	「誰」 nom. OM. kōṇa SKKo. koṇə, ko:ṇu Ko. koṇ(a) (狭い o)
rikkē-ra	rikkavupa v(av) 「バケツで水をやる」 Ma. rikav(a)ṇe "to empty"
p'ull-am	phūla n. 「花」 -pl. nom. OM phula n. "a flower" SKKo. phu:lə Ko. phūl(a) n.
dā-ri	dāvupa v(V) 「なる、そうである」-現在時制-2/3pl. OM. hoṇe "to be, to be created, to be approved, to be acceptable" SKKo. ja "to become" Ko. jāvap(a) "happen, take place, be, become, form, ensure, get etc."
ki	疑問小辞「か」(主動詞に付加し疑問文形成・句末で「または／それとも」)
attaṃ adv.	「今」 Skt atha OM. ātāṃ "then, in that case, now" SKKo. attā "now"

§ 2 - 2 - 7.

amma majjamma! mukka gōve=ci nākka

ō mhāṃtār-ō bāmmaṇ-u nākka

aṇṇā[S]-ka nāt't'ille b'auvā-ka baḷ-āye

yē-nat't'illēri ṭeligrāmu dē-ram

おかあさん、私のおかあさん。私は、ゴアが、嫌です。

この、老いぼれの、夫が、嫌です。

兄さんを、でなければ、弟を、送ってください。

来なければ、電報を、打ちます。

nākka 否定動詞「いない」 sg. OM. nakā,nako "no (a particle indicating

	refusal)" SKKo. naka
mhāmtār-ō	「老いた」-m. sg.
bāmman-u	「夫」-m. sg. SKKo. bammuṇu "husband" Ko. bamaṇ "brahman" <CDIJL 9327 brāhmaṇa
aṇṇā[S]-ka	aṇṇa m. 「兄」obl. -acc/dat "S"は音声区別符号。[ə:] を表示か? Ka. aṇṇa
nāt'tille	否定動詞 nā 「ない」条件分詞、「または」 OM. nāthila adj. "non-existent, unreal" Ko. nāthap(a) = nāsap(a) "be not, have not"
b'auvā-ka	bhāvu m. 「弟」obl. -dat/acc Skt bhrātṛ OM. bhāva m. "a brother, a companion" SKKo. bha:vu "brother" bha:vo "husband's brother (elder)"
baḷ-āye	baḷavupa v(av) 「送る」命令法-2sg OM. boḷavaṇe, boḷāvane "to see off, to send away"
yē-nat'tillēri	yaupa v(V) 「来る」-否定条件分詞
ṭeligrāmu m. ?	「電報」
dē-ram	devupa v(V) 「与える」現在時制-1sg. [命令法 2sg. dī] OM. deṇe "to give" SKKo. di "to give" Ko. devap(a), divap(a)

§ 2 - 2 - 8 .

sūṇeṃ b'okk-itāṇa paḷē-ram tumt'-i-li vāṭa

kāgada mēḷ-ḷa=sam yā, yā, veggim

tummi kōṇa=ile yē-nattileri hāṃga

bāye=ki vālī=ki sodd-iram hāvam

犬が、ほえるたび、見やります。あなたたちの、道を。

手紙が、着いたらすぐ、来てください、来てください、急いで。

あなたたちが、誰も、来なければ、ここに

井戸か、蔓か、探します、私。

sūṇ-εṃ n.	「犬」-n. sg. Skt śunaka OM. suṇeṃ n. "a dog" SKKo. su:ṇē "dog"
b'okk-itāṇa	bhokkapa v(i)-副詞的現在分詞 Ma. bhomk(a)ṇe, bhumk(a)ṇe "to bark" SKKo. bhōkə "to bark" Ko. bhomkap(a)
paḷē-ram	paḷevupa v(V) 「見る」現在時制-1sg.
tumt'-il-i	2pl. 可処分所有形容詞-f. sg. -長形
vāṭ-a f.	「道」-f. sg. OM. vāṭa f. "a path, a way, a road" Ko. vāṭ f. "way, manner"

mēḷ-ḷa=saṃ	mēḷapa v(a) 過去分詞(n. sg.)に副詞 asaṃ 「そのように」が結合。
yā	yaupa v(V) 「来る」-命令法 2. pl.
veggim̄ adv.	「急いで」 Skt > OM. vega "haste, hurry" Tu. vēga adv. "quickly, speedily" Ko. vegim̄, begin(a) "soon, quickly"
kōṇa=ile	「誰も」 ile は インド・アーリヤ系の i に借用の le を二重付加したものか? OM. kōṇuhuvī "whosoever" kōṇhī "any" kōṇha "(with neg) anyone"
bāye f.	「井戸」 <bāy-a f. sg. Skt vāpī- OM. bāva, bāvī f. Ka. bāvi Ko. bāmy(a) f.
vāl-ī f.	「つる」-f. sg. SKKo. va:li "creeper" Ko. vāl f. "any creeping plant, wicker" CDIAL 11429 vallī f. "creeper"
sodd-iram̄	soddapa v(i) 「探す」 現在時制-1sg. OM. sodhaṇe "to purify, to search, to dig out" SKKo. so:di "to seek" Ko. sodap(a)

§ 3. 表記と音韻

§ 3-1. 音量表記

先に述べたように、「ゴア八連」でのカンナダ文字長母音表記は、必ずしも音量の違いを反映するものではない。

中期インド・アーリヤ語から現代インド・アーリヤ語への変化は、短母音・単子音の脱落のように音量による対立を無効にするような変化で特徴付けられる。このため、固有語に関しては、母音や子音の量的交替は、形態変化の一環としてはば予測可能である。たとえば、カーサラゴード・カラダ固有語で長母音は以下の環境に現れる。

- (1) 単音節語（開音節のみ）
- (2) (口) 短母音 a, i, u に終わる 2 音節語の第 1 音節。
 - 2a. 弱変化 2 音節名詞・形容詞の主格単数(m. -u; f. -i, -a; n. -a)
 - 2b. 弱変化 2 音節男性名詞・形容詞の複数主格(-a)
 - 2c. 語幹母音 -i, a をもつ 2 音節動詞の命令法 2sg. (接辞ゼロ)
- (3) 語幹母音 ay/av をもつ動詞（使役動詞を含む）の命令法 2sg. 接辞(-āye)
- (4) 母音 e で終わる母音動詞 nidde-vupa 『眠る』の命令法 2sg. nīde
- (5) 名詞・形容詞の斜格接辞

このうち、(2)と(4)の長母音化は、後続する重子音の単子音化を伴っており、子音の音量が母音によって代償されていると見なすことができる。

(例) *soddapa v(i)* 「探す」 命令法 2sg *sōdi SKKo. so:di*
rāti f. 「夜」 *rātti sg. obl./pl. nom.*
 cf. *bassa n.* 「バス」 *bassā sg. obl.*

語末短母音の保持と(2)のような子音と母音の音量交替は、カーサラゴード・カラダ語と SKKo. に共通する際立って保守的な特徴であるといえる。²⁾

このように、固有語に限れば母音の長短の対立が機能を失っているため、コンカニ語のカンナダ文字表記では、余剰となっている母音の長短表記を、主として後続音節単母音の脱落によって新たに発生したと見られる母音の音価(広狭)の対立の表記に充てている。『カラダ』のカーサラゴード・カラダ語作品の表記は、これと類似した長母音表記の使用が特徴である。ただし、サンスクリットやカンナダ語・トゥル語の借用語では母音の長短の対立が維持されており、それに従って表記されているため、長母音で表記された音が実際に長く発音されるかどうかは、綴り字だけでは判定できない。

短母音の脱落がほとんど起きなかったカーサラゴード・カラダ語では、コンカニ語と比べると、実際には短い母音に対して音価の区別のために意図的に長母音表記が付されている場合は少ないと予想される。たとえば、Bejjūr (2001)は、カーサラゴード・カラダ語の表記のために区別符号を導入しているが、母音に関わるものは、母音 *a* の広さの区別記号と、後述する母音 [æ] を表記する記号だけである。このような予断が妥当であるかどうかを、「ゴア八連」の実際の表記について検討してみる。

§ 3-1-1. *a/ā*

固有語に関しては音声的に広い *a* を長母音 *ā*、狭い *a* [æ] を *a* で表記している可能性が強い。たとえば、第1音節で重子音(鼻子音・口子音結合を含む)が後続する位置では音声的に長い母音は現れないが、この位置では *ā* の表記が多用され、*a* が使用されているのは以下の語例に限られる。

借用語 *amma ayyō aṇṇā-ka*

サンスクリット借用語 *caṃdrā-tsō* [æ]

1sg. 人称代名詞派生の所有形容詞³⁾ *majj-*, *matt'-aṃ*, *matt'-a-laṃ*, *majj-o*

aṭ'rā pannara attaṃ sakkaḷaṃ kaśśaṃ hatyā-nnaṃ taṃts-ōṃ

attaṃ, *hatyā-nnaṃ*, *taṃts-ōṃ* を除く固有語は、いずれも SKKo. の [æ] に対応していることがわかる。一方、*attaṃ* 以外の SKKo. の [a] に対応する語例は、この位置では *ā* が使用されているといってよい(例外: *b'auvā-ka* 二重母音字を使用)。遠称指示代名詞派生の所有形容詞 *taṃts-ōṃ* (第6連)は、他の代名詞との比較から *ā* が期待される場所であるが、この

語は 2pl 派生の所有形容詞 *tumts-o* の誤植の可能性もある。第 1 音節では、単子音の後続する位置でも SKKo. との対応を考慮するとほぼ *a/ā* が音価の対立を表記していると見られる。(例: *b'ārī/b'ari*, *barōv-um/sārō-nnam*) 借用語とみられる語の中では、*kācce* に原語にはない長母音表記が現れるが、これは、短い *a* で表記する [a] (特にその長い変種) をカナダ語にない独自の発音と感している話者の印象を反映しているとも見られる。[a] の長音には、第 7 連の *aṅṅā[S]-ka* のような区別符号 S (ローマ字活字の S) 付きの長母音表記が充てられている。『カラーダ』ではこの記号の使用例はこの 1 例のみであるが、その後のカーサラゴード・カラーダ語作品では、[a] の長音のほか、鼻母音など話者にとってカーサラゴード・カラーダ語独特とみられる音の表記にしばしば用いられている。

これに対して、その他の位置 (第 2 音節以下と単音節語) ではむしろ実際の長さを反映した使い分けになっているように見受けられる。音声的に長いと予想されるのに *a* で表記されているのは、他の接辞が後続しない斜格接辞 (*vāgg'ā-ca*, *hām-tya*) だけである。一方、SKKo. との対応は、第 2 音節以下では必ずしも維持されない。特に、数詞の 15 と 18 については、**daśa* 起源のインド・アーリヤ語数詞の中に、グジャラート語のように (短母音化を経て?) 最後の母音が脱落したものと、*-rā* で残るものがあり、興味深い点であるが、古マラーティー語と同様に分裂した対応 (*pannara* vs. *aṭ'rā*) になっている。語末に現れる *ā* としては、筆者の資料には第 1 音節が短い 2 音節語の語例 (*parā* 「あさって」*dahā~dhā* 「10」など) があるが、この環境の語は「ゴア八連」にはない。

§ 3 -- 1 -- 2. *e/ē, o/ō*

コンカニ語では、後続する音節の脱落母音が *a* であったか *i/u* であったかに対応すると見られる *e, o* の広さの対立が見られるが、カーサラゴード・カラーダ語では同一調音点の子音に挟まれた位置の連声を除けばこれらの母音が脱落せず、したがって、母音の広さの違いは音声的な変異にとどまっており弁別的でないと考えられる。実際、「ゴア八連」でも語末以外の位置での *e/ō* は、実際の母音の長短にしたがっていると考えられる。たとえば、*mēl-ḷam*, *mēl-ḷa=sam* では重子音の前の長母音表記となっているが、この二重子音は連声による子音の同化の結果生じた派生的なものであり、語幹 *mēl-* の長さは維持される。

一方、語末母音の表記には *e/ē, o/ō* のそれぞれ両方がランダムに用いられているように見える。多音節語の語末母音は、斜格接辞や *ayyō* のような間投詞を除けば短い。名詞・形容詞強変化の *m. sg. nom. /m. pl. nom.* がそれぞれ *o/e* で終わるが、この表記に限ると以下のようなになる。

単数: *ō: kālā-tsō, pōrn-ō, camdrā-tsō, tīl-ō, mhamtār-ō, b'ojjō*

o: jāg-o, majj-o, khiṃts-allo

複数: ē: aumt'-e-lē, mhāṃtar-ē e: なし

全体としては長母音表記が好まれているように見えるが、これをどう解釈するかにはいろいろな可能性がある。

本来の e/o 以外の音に ē/ō の表記が用いられているのが、av/ay を語幹母音にもつ動詞（動名詞形として -avupa に終わる形をもつ動詞。使役動詞を含む。）と paḷe-vupa 「見る」の活用形である。後続の接辞が -u に始まる場合に、ōv-u（例：barōv-uṃ）あるいは融合して ō（例：paḷō-mcī-li）、現在時制接辞 -r の前で ē（例：rikkē-ra, paḷē-ram）が現れる。「ゴア八連」の表記においては、*av/*ay に由来する ō/ē と *ev/*ey（ほかに、nidde-vupa 「眠る」、piye-vupa 「飲む」、bhiye-vupa 「恐れる」など）に由来する ō/ē の区別がない。後者を yō(ē) で書き分けている書き手や、発音の違いを自覚している話者もあり、この区別は方言差である可能性がある。

§ 3 - 1 - 3. i/ī, u/ū

全体として、長さの区別を反映しているとみられるが、長い音が予想されるところで短母音表記が使用されている例（接辞の後続しない斜格 rātti）、逆に、短いと考えられる位置に長母音が使用されている例（形容詞長形接辞の前の性・数接辞 paḷō-mcī-li）がある。名詞・形容詞の f. sg. nom. 接辞は、強変化が *ī、弱変化が *i（および *a）に由来すると考えられるが、弱変化名詞の vāli 以外はすべて短い。一方、強調小辞の ci は、ci のほかに、一箇所 cī の表記が見られる。この小辞は、前の音を長く伸ばす発音が伴うことが多いが、それ自体は短いのが普通である考えられる。

e, o の場合と同様、i, u についても、接辞や語末母音の表記に関しては母音の長短の書き分けにつねに原則があるようには感じられない。

§ 3 - 1 - 4. 母音 [æ]

Beḷḷūr (2001) が別の記号（カンナダ文字の母音符号 e と ā の組み合わせ）で表記した母音 [æ] は、強変化名詞・形容詞の斜格に現れ、また、口蓋子音のあとの a は、原則としてこの母音に対応する短母音の異音をもつ。e が広い異音をもつ語末（開音節）では、ya と ye の間の揺れも観察され（cf. bāye f., yaupa [jæwpə] vs. yē-）、口蓋子音のあとで a/e の対立が中和される場合があることをうかがわせる。「ゴア八連」においては、この母音は ya/yā（例：hām-tya）か、あるいは口蓋子音のあとでは、a/ā（例：vāgg'ā-ca）で表記されている。

Beḷḷūr (2001) がこの表記をとらないのは、カンナダ語の表記で子音に y が続く結合子音字は、通常は最初の子音字が長く発音されることを意識し、このような子音の延長を伴わ

ないカーサラゴード・カラダ語の[Cæ]を区別したいと考えたからではないかと想像される。「ゴア八連」では逆に、æの表記にy(a)を使用したために、重子音で発音されると考えられる子音が単子音で表記されている例(hatyā-nnam)がある。

§ 3-2. 鼻母音表記

カーサラゴード・カラダ語で鼻母音の出現する環境は以下の通りである。

- (1) 語末(名詞・形容詞 n. sg./pl. nom. 接辞、副詞語尾、動詞1人称接辞、一部の代名詞)
- (2) 接辞末の鼻子音ではじまる音節が脱落した場合、先行の母音が鼻母音化
- (3) § 3-1 (2)の子音単子音化の環境で、鼻子音・口子音結合の鼻音が脱落するとき、先行する長母音が鼻母音となる。
- (4) 鼻子音および語中の子音[v]ではじまる音節の母音は音声的には鼻母音

「ゴア八連」では、(1)から(3)は、母音表記の後ろにアヌスワラ記号を付することによって表記する。アヌスワラ記号は、鼻子音・口子音結合の先行鼻子音を表記する記号であるが、鼻子音・口子音結合は短母音と二重母音(音韻的には avu, ayi と解釈可能)の後にしか生じないため、事実上鼻母音と短母音+鼻子音の連続が相補分布を成している。

例：(1) pʰull-am veggim yēm (2) uḍk-um < uḍk-unu; pī-mtam < pī-mtaṇa

(3) sāmga [sā:ga] cf. sāmgaṇa [saṅgaṇa]

語末では(4)についても、表記されているものがある(例：sārō-nnam, hāveṇ)が、amma, sēṇa, kōṇa, gōve, tummi, bʰokk-itāṇa では付加されていない。おそらく gōve では、本来の n. sg. nom の-em が任意の鼻音化と解釈され、つまり(1)が(4)と扱われて、鼻音表記が落ちているというように見える。斜格形も、予想される goyā- ではなく借用語などに見られる単に母音を延長した govē- が現れている。(4)の v-音節の鼻音化は、カーサラゴード・カラダ語で母音間の m が鼻摩擦音に変化したことを反映すると見られるが、語源的に本来鼻音でなかったことが明らかな v の後でも鼻音化が見られる(例：vavupa 命令法 2sg. va:vim)。なお、lpl. 代名詞の斜格語幹 a(v)um- も *am- に由来すると考えられるが、他の接辞の前では m は鼻子音として実現する。

第6連の tamts-om の末尾の m は、文法的には説明がつかない。母音衝突を避けるために挿入された次の語の-v が語境界を越えて鼻音化を起こしているようにも見えるし、あるいは単なる誤植の可能性もある。

§ 3-3. 鼻音同化

話者によって若干異なるが、カーサラゴード・カラダ語では鼻音に挟まれた子音が同化して鼻子音となる傾向が強い。「ゴア八連」では、このような音声的特徴が表記にも反映

されている。

hatyā-nnam < *hatyām-caṃ (n. pl.) sārō-nnam < *sārav-uṃc-aṃ (n. pl.)

これらの語形の最後の鼻母音表記は音韻的には弁別的でない話者が多いが、「ゴア八連」では文法解釈通りにアヌスワーラが付されている。

§ 3-4. 歯茎破擦音・摩擦音の表記

マラーティー語、コンカニ語、カーサラゴード・カラダ語固有語に共通の特徴として、歯茎破擦音[ts,dz]と歯茎摩擦音[s]が、硬口蓋破擦音・摩擦音と相補分布を成すことが挙げられる。インド系文字には、摩擦音については歯茎音字母(s)と硬口蓋音字母(ś と転写)の両方が存在するため、どの言語でもこれらが区別して書かれるが、破擦音については、マラーティー語・コンカニ語では、硬口蓋音字母 c, ch, j, jh を歯茎破擦音の表記にも充てている。しかし、カンナダ語やトゥル語には歯茎破擦音が存在せず、マラーティー語やコンカニ語の表記慣行も知られていないため、「ゴア八連」では無声歯茎破擦音をほぼ一貫して子音結合字 ts で表記している。ただし、重子音と単子音の区別はこの組み合わせでは表記されておらず、おそらく第6連に見える atsa は[attsə]に相当するものと見られる。表記上の ca と tsa の区別は、子音だけでなく母音[æ/a]の違いも反映している。これに対して、有声破擦音は、調音点に関わらず j の表記が用いられていることがわかる。majjo, b'ojj-ō の j は、それぞれ閉鎖の長い歯茎破擦音である。ただし、有気子音字ではなく子音結合の jh を用いた jhōru の表記は、気音ではなく歯茎調音を表記しようとしている可能性がある。

借用語では歯茎摩擦音、硬口蓋音ともに、そのままの環境で借用されるものがほとんどである。第6連 sévamṭ-yā のようなカーサラゴード・カラダ語の分布に同化した語はむしろ例外的であり、早い時期の借用を示唆するとも見られる。

§ 3-5. 有気音と h

表記の点でまず問題になるのは、有気子音字母があるにもかかわらず子音結合を用いている第2連の khimtsallo と jhōru の2語であろう。このうち、後者は前節で述べたように調音点の区別符号として h を使っている可能性があるが、前者についてはそのような説明は成り立たない。有気子音字 k' の用例もある。

有気音と無気音の区別や h の発音については、かなり個人差がある。過剰矯正ではないかとも見られる h の付加も観察される。しかし、「ゴア八連」での有気音表記は、近縁言語との比較と割合よく一致した h の表記になっている。疑わしい点としては、語彙では第3連の punhavē があるが、この h は、n の重子音表記を代用しているようにも見える。接辞では、可処分所有形容詞接辞はほぼ一貫して t' で表記されている中、第4連に hām-tya と

いう形が現れる。否定条件形容詞では、*nat't'illēri*, *nattileri* の両形が現れる。なお、有気子音の重子音表記はインド系文字の正書法では本来許容されない。(無気・有気の結合字で書く。)

これに対して、近称指示代名詞では *a* の前を除いてほぼ一貫して語頭の *h* が脱落する。前舌母音の前では *y* が現れており、後舌母音の前ではゼロとなっているが、後者でもドラヴィダ系言語の多くと同様、*vu*, *vo* のようなわたりを伴う発音となっていると考えられる。近称指示代名詞での語頭 *h* の脱落は、ほとんどの話者や書き手に共通しており、カーサラゴード・カラダ語で比較的早期に完了した変化であると考えられることができる。

§ 4. 文法と語彙

カーサラゴード・カラダ語の特徴のうち、ドラヴィダ系言語からの影響と見られる点についてはいくつかの論文に発表したことがあるので、ここでは繰り返さない。「ゴア八連」でも、親族名称体系のドラヴィダ語化、尊称親族名称の借用、小辞 *le* の借用 (以上 Kodama 1995 参照)、動詞否定活用の拡大と否定分詞の使用 (Kodama 2001) が観察される。

保守的な特徴のうち、短母音が保持されているために、名詞・形容詞の弱変化主格で性による区別が保たれていることと、二音節名詞では中期インド・アーリヤ語以来の語中二重子音がこれらの弱変化主格 (単数と男性複数) で母音の延長を伴って単子音化することについては § 3-1 で述べた。語彙リストにも対照した古マラーティー語 (13-14 世紀の作品が中心) で、表記上はすでに弱変化名詞の語末での母音の区別がほとんどなくなっていることと、重子音表記が見られないことは興味深い。ゴアのコンカニ語の場合はこれよりも遅く、ポルトガル人来航後の 16 世紀まで語末短母音の区別が維持されていたようであるが、この時期の資料では重子音表記は観察されない。

この章では、以上のような通時的な分析を離れて、現代インド・アーリヤ語としてのカーサラゴード・カラダ語の文法的特徴を、「ゴア八連」に現れる形を中心に概括する。

§ 4-1. 人称代名詞と指示代名詞

- (1) 人称代名詞は 1sg. 1pl. 2sg. 2pl. の 4 つである。
- (2) 指示代名詞は、遠称/近称、*m./f./n.*、*sg./pl.* の組み合わせで 12 個ある。
- (3) 人称代名詞と指示代名詞は、主格、能格、与対格、斜格 (用例無し) に活用する。ただし、指示代名詞 *m./n.* は、主格以外では同形である。また、複数では *m./f.* の区別もほぼなくなっている。⁴⁾
- (4) 人称代名詞と指示代名詞は、不可処分所有形容詞と可処分所有形容詞を派生する。人

称代名詞・指示代名詞の斜格と不可処分所有形容詞の斜格は同形である。

§ 4 - 2 . 疑問代名詞と不定代名詞

- (5) 疑問代名詞は性・数・人称ではなく人と人以外 (kōṇa 「誰」 / kaśśaṃ 「何」) で区別される。
- (6) 不定代名詞は痕跡的 (例: kōṇa=ile) で、疑問詞句に小辞を付加する構文で代用される。
- (7) kōṇa 「誰」は人称代名詞に準じて活用する (用例無し)。kaśśaṃ 「何」は直格のみをもち、斜格は kaśalam 「どのような」の斜格で代用する。

§ 4 - 3 . 名詞・形容詞

- (8) 名詞は、主格・能格/具格 (用例無し)・斜格に活用する。与対格、所格などの格接辞は、斜格に膠着する。
- (9) 形容詞は、直格・斜格に活用する。
- (10) 固有語の名詞・形容詞は、強変化あるいは弱変化の活用タイプに分類される。格接辞の組み合わせで活用タイプが判別できる。
- (11) 弱変化には以下の組み合わせがある。(sg. nom. /sg. obl. /pl. nom.)
- m. u/ā/a n. a/ā/aṃ f. a/ē/o; i/i/i
- m. sg., m. pl., n. sg., f. sg. の2音節名詞の各語形では重子音の単子音化を伴う。
- (12) 強変化には以下の組み合わせがある。⁵⁾
- m. o/yā/e n. eṃ/yā/iṃ; aṃ/yā/iṃ; uṃ/vā/voṃ f. i/yā/yo
- (13) pl. obl. は形容詞では sg. obl. と同形。名詞では sg. obl. の鼻母音化が規則的な形である。(ただし、f. を中心に不規則形も多い。用例無し)
- (14) 借用語を中心に不変化形容詞もみられる。
- (15) 借用語の名詞は必ずしも上記の活用タイプに従わず、単に語末母音を延長することにより斜格を派生するものも多い。ただし、サンスクリットからの借用語のように、借用にあたって活用接辞を付加するパターンが観察されるものもある。
- (16) 不可処分所有形容詞、可処分所有形容詞は、代名詞・名詞に、所格形容詞は、時間・場所の副詞や所格名詞句に、それぞれ接辞を付加して派生する。
- (17) 上記の派生形容詞や過去分詞、未完了分詞、現在分詞は、すべて強変化活用であり、中性では aṃ/yā/iṃ の接辞をとる。
- (18) 派生形容詞や過去分詞、未完了分詞、現在分詞には、活用接辞の後に接辞-l-を挟んでさらに活用接辞を繰り返す長形がある。長形の機能についてはよくわからない点が多い。

§ 4 - 4 . 動詞

- (19) 動詞各語形は定形と不定形に分類される。
- (20) 定形動詞はさらに、基本定形動詞と分詞派生定形動詞に分類される。基本定形動詞は人称・数に応じた6つの活用形をもつ。分詞派生定形動詞は、人称・性・数に応じた活用形をもつ。
- (21) 動詞は子音で始まる接辞（現在時制・否定活用諸形・不定未来時制・現在分詞派生諸形）またはゼロ接辞（命令法 2sg.）の前で現れる「語幹母音」に応じて活用タイプにわかれる。語幹母音 *i* と語幹母音 *a* は母音で始まる接辞（動名詞 *-apa* など）の前では落とされる。語幹母音 *av/ay* の動詞では、前舌母音を除く母音ではじまる接辞の前で *av*（「ゴア八連」では *õ* と表記）、前舌母音で始まる接辞の前で *ay*、ゼロ接辞の前で *aye*、子音で始まる接辞の前では *ay*（「ゴア八連」では *ẽ* と表記）の語幹母音をもつ。語幹母音のない母音幹動詞は、母音で始まる接辞の前で *-v/-y* をとるほか、接辞に応じて語幹が交替するものが多い。

§ 4 - 4 - 1 . 基本定形動詞

- (22) 命令法の接辞は以下の通り。
- 1sg. *um*⁶⁾ pl. *uvyãm* 2sg. (ゼロ) 2pl. *yã* 3sg. *u* 3pl. *uvi*
 2sg. では、語幹母音 *i/a/aye* が現れ、2音節語で重子音の単子音化が起きる。
- (23) 現在時制の接辞は以下の通り。
- 1sg. *r-am* pl. *r-im* 2sg. *r-a* 2pl. *r-i* 3sg. *r-a* 3pl. *r-i*
 語幹母音異形態 *i/a/ay* が現れる。
- 現在時制の接辞 *-r-* はカーサラゴード・カラダ語にきわめて特徴的で、他のマラーティー語・コンカニ語方言には親縁の接辞がみあたらない。ただし、コンカニ語では現在分詞を語幹に基本定形動詞の接辞体系を使用する現在時制があり、また、サウスカナラのチトパーオン・バラモンのマラーティー語の *-c-* を時制接辞とする現在時制も同様の接辞組織を用いる。
- (24) 存在動詞 *acc-apa* 「ある」は、現在時制では3人称のみに活用し、sg. *-a* pl. *-i* の異形態接辞をとる。
- (25) 「ゴア八連」に現れない他の基本定形動詞には、否定現在時制、否定過去時制、不定未来時制がある。これらの定動詞形は、いずれも語幹母音異形態 *i/a/ay* をとり、否定両時制では融合により生じた膠着的否定形態素 *-n-* をもつが、時制の区別は基本的には人称接辞組織の違いで表示される。

§ 4 - 4 - 2. 分詞派生定形動詞

- (26) 分詞派生定形動詞は、現在分詞・過去分詞になんらかの助動詞が膠着して生成されたと考えられる時制で、1人称において *m. sg. am f. sg em m/f. pl. im* の人称接辞をとることで特徴付けられる。他の人称では強変化形容詞と共通の性・数接辞が現れる。
- (27) 分詞派生未来時制は、現在分詞に人称接辞を付加する組成をもち、動詞各語幹は現在分詞と同じ交替形をとる。すなわち、語幹母音 *i/a/ay*。さらに、母音幹動詞および語幹母音が *ay* の動詞、語幹末子音が *v* の動詞は、現在分詞接辞 *-t* の前に *m* をとる。これらは、中期インド・アーリヤ語の分詞接辞 **-nt-* を形態交替形として保持したものである可能性があるが、共時的にはほぼ語幹の音韻で予測可能な分布である。
- (28) 過去時制は、過去分詞に人称接辞を付加したと考えられる組成をもつ。他動詞では、格表示に関わらず目的語の性・数に一致するため、1人称形をもたず、形態的には過去分詞そのものである。
- (29) 過去時制は、中期インド・アーリヤ語の形態を引き継いでいる場合など、語幹交替を含む不規則な形態をとるものが多い。規則的な接辞は、*-il-*であるが、この *i* は調音点の近い子音の間で脱落して連声を引き起こす。
- (30) 再帰的自動詞の過去分詞形は、*-il-*ではなく *-al-*または *-āl-*をとるが、使役的他動詞の中にも *-il-*に加えて *-al-*または *-āl-*の過去分詞形をもつものがある。これらの再帰過去分詞形は、能格項（行為者項）をもたない過去時制構文に用いられる。（例：*khiṃts-allo, baḍipp-alam*）
- (31) 「ゴア八連」に現れない他の分詞派生定形動詞には、過去分詞と存在動詞現在時制との組み合わせによる完了時制・完了否定時制や現在分詞と存在動詞過去時制の組み合わせ（および縮約）による未完了時制がある。

§ 4 - 4 - 3. 不定形

- (32) 不定形は、形容詞的分詞、動名詞類、副詞的分詞に分類できる。
- (33) 形容詞的分詞には過去分詞と未完了分詞(*-umc-*)がある。現在分詞は動詞の分詞派生活用にのみ残存する。ほかに否定過去分詞がある。
- (34) 形容詞的分詞は、分詞関係節の主動詞となる。分詞関係節の主語や目的語には関わりなく、分詞は被修飾語の性・数・格に一致する。（例：*paḷō-ṃcī-li dṛṣṭ-i*）主節主動詞として（肯定）過去分詞は過去時制構文を、未完了分詞はモダリティ構文を構成する。（例：*śēṇa sārō-nnam*）また分詞関係節と副詞の組み合わせで、時間節・様態節・原因節などさまざまな副文が構成される。（例：*kāgada mēḷ-ḷa=sam*）

- (35) 動名詞類は、名詞と同様に sg. /pl. の両形をもち名詞句を構成する動名詞⁷⁾ (例 : ya-(v)upa sg. cf. ya-upi pl.) のほか、与対格接辞を伴って目的句として機能したり助動詞構文を構成したりする不定詞 2 形がある。形態的には前者 (-ya[ka]) が後者 (-u[m]) の斜格形に起源をもつように見える。
- (36) 副詞的分詞は、主語の性・数・人称に関わらず不変化で、単独で時間節・条件節の主動詞となる。絶対分詞(-unu ~-um)、現在分詞から派生した副詞的分詞 (-[i/a/m]tana ~-[i/a/m]tam)、過去分詞から派生した条件分詞(-[i]lIeri)のほか、否定絶対分詞、否定条件分詞がある。

§ 4 - 5. 不変化詞と語順

- (37) 活用しない語類としては、副詞・間投詞・小辞がある。
- (38) 「1」を除く基本数詞は不変化詞であるが、ただし人間をあらわす語形を派生する。「ゴア八連」では āṭ'adaṇa ではなく無標の āṭ'a が人間の数に使われている。
- (39) 助動詞の中にもすべての活用を失ったものがある。
- (40) 接続詞は多くの分詞形や小辞で代用される傾向が強い。たとえば、nāt't'ille(ri)「それとも」は、存在動詞の否定条件分詞、引用小辞 ṇu は、動詞 mhaṇapa 「言う」の絶対分詞形の縮約である。
- (41) 引用小辞 ṇu, 疑問小辞 ki, 強調小辞 ci は、主節主動詞に後接できる。同様の性質をもつ語は、コピュラ動詞 dāvupa の一部の活用形 (例 : dā-lIeri) や呼格小辞など限られている。
- (42) 主節構成素の語順は自由であるが、副文内では動詞が最後でなければならない。修飾語は被修飾語に必ず先行する。ただし、「ゴア八連」では名詞修飾用法の形容詞や副文内の修飾節を行末に移動した結果この制約が破られている語順が観察される。

§ 4 - 6. 「ゴア八連」の語彙

- (43) インド・アーリヤ系語彙のうち、OM. に親縁の語がなくコンカニ語とのみ対応する西海岸的な語彙には以下のようなものがある。

hāvaṃ~hāveṃ (主格・能格語形) dāvupa (<*jā- 「なる」の意味で)

voccapa (「行く」現在語幹の交替形として CDIAL 11203)

hāṃga thaim ceḍḍuṃ (CDIAL 4902) vuḍasu udo (CDIAL 1921) vālī (CDIAL 11429)

baravupa (借用) vavupa (CDIAL 11282)

- (44) kāgada (ペルシャ語 kâqaz), ṭeligrāmu (英語 telegramme) のようにインド全土に分布する外来語を除くと、カーサラゴード・カラード語に見られる借用語は、カンナダ

語起源・トゥル語起源・インド古典語起源のものにはほぼ分類できる。インド古典語起源の借用語の多くはカンナダ語を経由して借用されたと考えられるが、文語としてのカンナダ語の使用は、コンカニ語と共通する動詞「書く」の借用にも見られる通り移住以前にまで遡ると考えられ、その年代については特定できない。名詞の場合は弱変化、形容詞は通常不変化形容詞として借用されている。名詞の性の決定は語尾に応じた慣行があると考えられるが、その詳細はわからない。

- (45) カンナダ語固有語からの借用語は親族名称（年長）と *kācce* のみである。
 (46) トゥル語からの借用語は以下の通りで、基本的な語彙にも及んでいることがわかる。

動詞：*baḍipp-alam, nīk-item*

名詞・代名詞：*śēvaṃt-yā, oṭṭu*

小辞：*le*

- (47) 動詞の借用には、*baḍipp-apa* のように接辞 $-(p)p-$ を付加するものと、*nīk-apa* のように語幹を直接借用するものがある。トゥル語の動詞 *boḍi-* は未完了語幹に *baḍipp-* の形をもつ動詞であるが、カンナダ語の動詞派生接辞 $-is$ をもつ動詞のようにまったく $-p$ をもたない動詞でも $-isp-apa$ の形で借用が行なわれる。

- (48) これらの動詞活用語は、語幹母音として他動詞は *i*、自動詞は *a* をとり、再帰過去分詞構文 *baḍipp-alam* や、使役動詞 *baḍippav-apa* などさまざまな派生形を固有語の動詞と同様に形成する。逆に、トゥル語複合動詞構文の借用翻訳とみられる構文もある。
 (例：*mukka baḍipp-alam* の与対格 *mukka* は、トゥル語与格に相当し、対格目的語をもつ他動詞過去分詞構文のような能格主語をとらない。)

§ 5. 作品の背景

「ゴア八連」は、後妻としてゴアに嫁いだ女性の不幸を母親への手紙の形式で表現した、ややふざけた内容の詩である。言語的特徴から推察する限りではゴアに近い地域からの移民であろうと考えられるカーサラゴード・バラモンが、現在その故地やその言語に対して抱いている感情が窺われることのほかには、内容の面で特筆すべき点はない。

しかし、このような作品が創作され、それがコミュニティー全体を読者として想定する出版物に掲載されていることの背景に、これらの移民コミュニティーが内部に抱える矛盾があることは指摘しておかなければならない。

「カラーダ・バラモン」というコミュニティーは、内部的にも対外的にも、地域社会に存在する通婚規制によってその成員が基本的に決定される集団のひとつである。カラー

ダ・バラモンの成員に許容される縁組の相手は、女性がいくつかの上位バラモンに嫁ぐ場合を除けば、同じカラダ・バラモンに限られる。さらに、カラダ・バラモンの内部は、ゴートラと呼ばれる（理論的には）24の父系氏族に区切られており、これが外婚集団の単位として機能して同じゴートラの成員の縁談は許容されない。したがって、縁談は本人のゴートラを除く残り23のゴートラの中から（さらに母系の近い親戚を除き、）星占いの結果を加味して決定されることになる。ところが、移民コミュニティであるカーサラゴードのカラダ・バラモンには実際には6つのゴートラしか存在しない。したがって、大きなゴートラの成員は可能な縁談の範囲が著しく狭められることになる。

このため、なるべく広い範囲から縁談を求めたいという圧力はコミュニティに常に内在していたようで、近代化によって交通・通信環境が改善すると、通婚圏はそれまで（カーサラゴード・カラダ語という独自の言語を生み出すほどに）断絶していた北の諸地域まで拡大することになった。このような通婚ネットワークの拡大は、近代インドの他の地域の有力コミュニティとも共通する動きだったようで、たとえば同じくマラータ・バラモンの移民コミュニティであるサウス・カナラのチトパーオン・コミュニティは、20世紀初頭に独立運動の英雄ティラクがマンガロールを訪問し、マハラーシュトラのチトパーオン・コミュニティとの交流が回復したことを記憶している。⁸⁾

「ゴア八連」は、このように通婚圏が拡大する中で、ゴアやマハラーシュトラのような、言葉の通じない地域との縁談が（特に個人の幸福という観点からは）必ずしも好ましくないということを描いた作品、ともいえる。とはいえ、縁談とそのためのコミュニティ内の情報交換がこの地域での社会生活の重要な部分を占めるという現実はず変わらず、カンナダ語地域である北カナラ地方のカラダ・バラモンとの縁談は、食文化や生活習慣の違いにも関わらず積極的に行なわれている。北カナラ地方からカラダ・バラモン女性が嫁いできた家庭も多い。この場合、家庭内での使用言語はカーサラゴード・カラダ語からカンナダ語に切り替わることになり、特に都市部の核家族の場合、カーサラゴード・カラダ語を母語として習得しない子供も増えている。

カーサラゴード・カラダ語が他のインド・アーリア系現代語から隔離された環境で数百年にわたって維持された背景には、大家族制に加えてコミュニティの通婚規制が大きく関わっていることは間違いない。皮肉なことに、近代化にともなって通婚規制が今度はカーサラゴード・カラダ語の存続を脅かしている。近年コミュニティ内部で自らの言語と言語文化への関心が高まっていることは、地域と言語の共通性をとるか、通婚集団（カースト）の拡大をとるかのアイデンティティーの揺らぎを反映しているのかもしれない。

注

1. 現代マラーティー語およびデーヴァナーガリー表記の現代コンカニ語では、語末や長音節の前の母音の脱落する位置でも母音ゼロ記号を用いないため、短母音aと表記の区別がないが、母音のない位置の表記上のaは(a)で転記する。
2. カーサラゴード・カラダ語をはじめとするトゥル語地域のインド・アーリヤ語では共時的には重子音と単子音の区別があるものが多いが、この区別がドラヴィダ語との接触の結果新たに獲得されたものであるのか、古コンカニ語より古い段階の中期インド・アーリヤ語の区別をそのまま保持しているものであるのかはさらに検討が必要である。ほぼ同時代の天草版平家物語では日本語の促音が重子音としてローマ字表記されており、ゴアの宣教師たちが音声的に重子音を区別できなかったとは考えにくい。しかし、古コンカニ語では音韻的に重子音と単子音の区別がなかったために、音声的には長かった子音を単子音で表記していた、という可能性は否定できない。カーサラゴード・カラダ語の形態素内での[a]/[ə]の出現は、ほぼ後続の子音が本来の重子音であるか単子音であるかに条件付けられており、中期インド・アーリヤ語におけるVCCとVCの区別が、母音の音量よりはむしろ音価に影響を与える形で保持されている、という点はこのコンカニ語諸方言と共通する特徴である。本来の単子音の前では[a:]/[ə]の長さによる対立がある(例: mā-apa v(i) 「殺す」vs. mar-apa v(a) 「死ぬ」)から、本来の重子音の前の短母音が、単子音の前の長母音と音質の点でのみ合流したことになる。中期インド・アーリヤ語の重子音がまず単子音化して同時に母音の代償延長が生じ、次いで単子音化した閉鎖音や側面音が二次的に再び重子音化した、という可能性も排除できないが、raḍ-apa v(a) 「泣く」のように本来単子音であった閉鎖音は常に単子音のままであり、また、音量による音価の区別が生じなかったと考えられるa以外の母音の後でも重子音と単子音の区別は保たれている。
3. リストでは代名詞語形変化の対照を示していないが、1人称代名詞の主格以外の語幹は、OM. では mā-で一貫しているのに対し、SKKo. では acc/dat. makkə 所有形容詞1 majj- に対し、所有形容詞2 が mægəl、斜格形では māj- というように語幹母音が交替する。Ko. では acc/dat. maka に対して所有形容詞・斜格の両方が moj- となりやはり割れる。「ゴア八連」の所有形容詞の表記は狭いほうで統一されており、現代コンカニ語の所有形容詞に対応している。一方、acc/dat. はさらに狭い mukko となっており、他のマラーティー語・コンカニ語諸方言内での分布がどうなっているのが興味深い。
4. f. pl. の遠称 tyo と近称 yo は、女性に単する尊称としてのみ用いられる。このような m.pl. の m/f. pl. への転用は、人称代名詞だけでなく、形容詞や動詞を含め文法範疇のすべてに及び、ドラヴィダ語によく似た複数体系を生じている。
5. ほかに、m. u/vā/u f. u/vē/vo (pl. obl. vāṃ) となる名詞が少数ある。
6. 「ゴア八連」での用例にも見られるように、命令法1人称単数は疑問文にも現れて、話し手の動作に対する聞き手(または第3者)の意思を問うモダリティの表現形式として機能する。
7. 動名詞接辞は、v(V) で -vup-、v(av) と語幹末子音がvの動詞で -up-、その他の動詞で -ap- であり、さらに数接辞(sg. -a, pl. -i)を伴う。
8. ブラバール・ジョーシ(M. Prabhākara Jōśi)氏による。

[参考文献]

- Bellūr Rādhakṛṣṇa (Belluru, Radhakrishna) 2001. *kāsaragōḍina karāḍa upabhāṣe (Karada Dialect of Kasaragod)* Mangalore: Sharada Press
- Borkar, Suresh J., Mukesh P. Thali & Damodar K. Ghanekar. 1999. *Konkani English Illustrated Dictionary*. Vol.1 Panaji:Rajhauns Vitaran. (2002. Vol.2)
- Ghatage, Amrit Madhav 1963. *Konkani of South Kanara*. Bombay: State Board for Literature and Culture
- 1968. “The Present Tense in Some Marathi Dialects” in Bh, Krishnamurti ed. *Studies in Indian Linguistics*. Annamalainagar: Annamalai University
- Kodama, Nozomi 1991. “An Introductory Note on Kasaragod Karhadas: an exclusively

- intracommunal language in a multilingual society” In T. Nara ed. *A Computer Assisted Study of South Asian Languages. Annual Report on CIIL-ILCAA Joint Research Project 2*. Tokyo:Tokyo University of Foreign Studies.
- 1995. Kasaragod Karhadi Verb Morphology” In T. Nara ed. *A Computer Assisted Study of South Asian Languages. Annual Report on CIIL-ILCAA Joint Research Project 5*. Tokyo:Tokyo University of Foreign Studies.
- 2001. “Convergence Pattern in Tuluva: A New Scope for Comparative Studies.” In P. Bhaskararao and K.V.Subbarao eds. *The Yearbook of South Asian Languages and Linguistics*. 185-205. New Delhi: Sage Publications
- Maffei, Angelus Francis Xavier. first published in 1883. Reprint in 1983 as *An English-Konkani Dictionary/Konkani-English Dictionary*. New Delhi: Asian Educational Service.
- Molesworth J. T. & T. Candy. 1847¹ 1873² Reprint in 1983 as *Molesworth's English and Marathi Dictionary*. New Delhi: Asian Educational Service.
- Rajathi, J. 1976. *Survey of Konkani in Kerala*. Language and Mother Tongue. Monograph No. 4. Office of the Registrar General, India
- Tulpule, S. G. & Feldhaus, Anne. 2000. *A Dictionary of Old Marathi*. London: Oxford University Press.
- CDIAL. = Turner, Ralph Lilley, Sir. 1962-1966. *A comparative dictionary of Indo-Aryan languages*. London: Oxford University Press,. Includes three supplements, published 1969-1985. (<http://dsal.uchicago.edu/dictionaries/soas/index.html>)
- Tulu Lexicon = Upadhyaya, U. P. ed. 1988-1997. *Tulu-Kannada-English Lexicon*. Udupi: Tulu Lexicon Project, Rastrakavi Govind Pai Samshodhana Kendra